



## 災害と時間

吉田, 耕平

---

**(Citation)**

社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:135-136

**(Issue Date)**

2022-06-30

**(Resource Type)**

research report

**(Version)**

Accepted Manuscript

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009420>



## コラム 5 災害と時間

吉田耕平

災害の現象は、どのように時間と関わっているだろうか。通常、災害は次から次へと継起する一連の出来事として現れる。報道などでは「そのとき」何が起こったかをひとつひとつ記述するのが普通だろう。阪神・淡路大震災では1995年1月17日の「5時46分に」地震が発生した等々。このようにカレンダーやタイムテーブルとしての〈時間〉のうゑに出来事を割り当てるのが世間一般の認識方法だと言えるだろう。

専門家の間には、これと異なる把握の方法も存在する。災害の研究（disaster studies）では一般に、一連の出来事の起点を災害の「素因」あるいは「ハザード」と捉えることとされている。たとえば地震や噴火、ハリケーンのような自然の事象のほか、出火や有害物質の拡散、ミサイルの発射といった事象は物事の発端と見なされる。これらは、災害とは区別される。これらの出来事だけならば被害が生じないからである。ハザードは、人間社会に襲いかかったときに初めて被害を生み出す。通説的な枠組みに従えば、「災害」とは、そうした結果として社会の働きが妨げられた事態を指す言葉である[UNDRR]。このような認識方法において、重要なのは原因と帰結の連関であると言える。時間の概念は因果連関の後ろに隠れてしまい、理論上、主要な役割を果たさなくなる。

これに対して、人文・社会科学の災害研究ではもっと様々な〈時間〉概念が用いられている。もとより、人間は悠久の大地とともに生きる存在である。どちらか一方が他方に対して影響するだけではない。自然と文化はともに、数百年、数千年の時間をかけて「災害」を生み出すのである。この観点から言えば、地震や噴火といったハザードは「社会と相互にかかわり、災害を作り上げている」ひとつの要素なのだと見なされる[Oliver-Smith 2002=2006: 48]。他方で、ひとたび河川が氾濫し、土砂が崩落すれば、人々は命と生活を守らなければならない。慣れ親しんだハザードならば、多少の時間の猶予はあるだろう。もしそれが全く未知のハザードならば、即時の救援が被害の広がりを抑え込む。ここには悠久の時間など流れていない。すべての行動は時間との戦いとなるだろう[Barton 1969=1974: 45-46]。これらの例はいずれも、出来事と出来事の間にある〈時間〉の重要性を示している。

しかし心理・精神分野の災害研究を見ると、それよりもさらに重要なのは個々の出来事であることに気づく。悲惨な出来事が過ぎ去れば、もはや時間に追われることはない。だが、その出来事が「起こってしまった」という事実はなくなる。このとき、災害の〈以前〉と〈以後〉が重要な意味を持つようになる。それというのも、「被災前と同じ生活は二度と帰っては来ないことを悟った時・・・愛する者や住む家と土地を失ったことの苦しみは、絶

望に変わる」からである [Raphael 1986=1989: 52]。それに加えて、災害を経験する過程では各人の〈過去〉や〈未来〉が失われていくことも指摘されている。災害前に思い描かれた未来の姿は、誰にも知り得ない。災害の渦中に生じた出来事さえ、十分に伝え残せない。私たちは「だれのものでもない」過去の記憶を、まだ見ぬ人たちが暮らす未来に向かって語ることしかできなくなるとされる [寺田 2018: 549]。これらの例において〈時間〉はたんに出来事が生起する時点でない。それらの生起時点の間にある距離でもない。それは〈かつて〉と〈これから〉の相違に基づき、出来事としての災害の意味を突きつける位相なのだと言えようか。

このように、災害研究の中では災害の概念それ自体が多様である。それに応じて〈時間〉の概念も変わってくる。だからと言って、それらは便宜に合わせて選ぶ道具だというわけでもない。実際、どのような災害事例であっても、カレンダーやタイムテーブルの上に出来事の継起を書き留めていくことは可能だろう。時間と切り離して出来事の起点や帰結を分析し、対策を練ることも常に求められる。一方、そうした時間の概念だけでは把握できない側面も必ずあるはずだ。次から次へと襲い掛かる出来事の間隔や、様々なものが寸断され、解体され、喪失してしまった世界の意味を考えようとするれば、〈かつて〉と〈これから〉という時間に向き合うことは避けられないだろう。——災害はこうした様々な〈時間〉と関わっているのである。

## 文献

Barton, A. H. [1969] *Communities in Disaster: A Sociological Analysis of Collective Stress Situations*. Garden City, NY: Doubleday. (安倍北夫監訳『災害の行動科学』学陽書房, 1974年.)

Oliver-Smith, A. [2002] “Theorizing Disasters: Nature Power and Culture” in Susanna M. Hoffman and Anthony Oliver-Smith eds., *Catastrophe and Culture: The Anthropology of Disaster*, Santa Fe, NM: School of American Research Press. (若林佳史訳「災害の理論的考察」『災害の人類学——カタストロフィと文化』明石書店, 2006年, 29-55.)

Raphael, B. [1986] *When Disaster Strikes: How Individuals and Communities Cope with Catastrophe*, New York, NY: Basic Books. (石丸正訳『災害が襲うとき——カタストロフィの精神医学』みすず書房, 1989年.)

UNDRR (United Nations Office for Disaster Risk Reduction) “Terminology,” Website. (<https://www.undrr.org/terminology>)

寺田匡宏 [2018] 『カタストロフと時間——記憶/語りと歴史の生成』<sup>エネルギー</sup> 京都大学出版会.